

「愚かなシモン」は16世紀頃のイギリス発祥の旋律です。エコー（やまびこ）効果が特徴的なこの旋律は、17世紀のオランダで歌詞が付けられ、羊飼いの男女のやり取りが描かれ、人気を博しました。本日はオランダとイギリスの作曲家による作品をお聴きいただきます。

コピー機が存在しなかった時代には、何かを学ぶ際、高価な印刷物を購入するか、元本から書き写す必要がありました。音楽を学ぶ際も同様で、生徒はそれぞれ自分の音楽帳を持っていて、自分か教師によって作品が書き写されていきました。

17世紀オランダのアーネムという街に住んでいたアンナ・マリア・ファン・アイルという女性の音楽帳もその一つです。その音楽帳には名の知れた作曲家だけでなく、彼女の教師であったギスベルト・ファン・ステーンウィックの作品が含まれていて、その中からアルマンド、「ラ・フレーフェリンデ」、サラバンドをお聴きいただきます。アルマンドは4拍子の舞曲、サラバンドは3拍子の舞曲です。「ラ・フレーフェリンデ」は、ベルギーに近いフランスの街「グラヴリーヌ」に由来しており、その旋律はとても親しみやすいです。ケルルの「戦い」もファン・アイルの音楽帳に含まれる作品で、当時流行していた音によって戦争の描写が表現されています。

フェルメールが活動していた17世紀オランダの音楽事情を調べてみると、自国で生み出された作品よりも、周りの国々の音楽を採り入れて楽しむ傾向にあったようです。17世紀終わり頃、アムステルダムで開業する出版家エティエンヌ・ロジェの出版目録から、本日は17世紀ドイツとフランスの鍵盤作曲家による作品を演奏します。

フローベルガーは17世紀に神聖ローマ帝国皇帝フェルディナント3世の外交官として各地を訪れ、様々な国の様式を的確に反映した作品を生み出しました。組曲はフランス様式で書かれており、フローベルガーのものはアルマンド、ジグ、クーラント、サラバンドの4つの舞曲で構成されています。本日演奏する「組曲 ニ長調」は、アルマンドにあたる楽章に題名が付いています。「私の来るべき死に寄せる瞑想」という題名を持つこのアルマンドは作曲者によって「小節線を見捨ててできるだけゆっくりと」演奏するよう指示されています。楽章の最後には「メメント・モリ」

(memento mori 「死を想え」)と書かれており、当時オランダの詩人で学者であったホイヘンスとフローベルガーとの手紙のやり取りの中で「メメント・モリのアルマンド」として話題に上っている作品でもあります。印象的なアルマンドの後、ジグ、クーラント、サラバンドの順番で続きます。

1689年にパリで出版されたダングルベールのクラヴサン曲集も、ロジェによりアムステルダムで再版されました。本日はこの中から「前奏曲」、「スペインのフォリーによる変奏曲」から7つの変奏を抜粋したもの、そしてこの曲集には含まれていない「老ゴーティエのシャコンヌ」の3曲を演奏します。「前奏曲」は17世紀フランスの

リュートの書法から影響を受けた「拍子のない」様式で書かれています。小節線のない書法で書かれたこのような前奏曲は、まるで詩を朗読するように演奏することが求められています。「スペインのフォリー」は当時良く知られた旋律と変奏です。シャコンヌは決められた低音と和声進行にもとづく変奏曲です。「老ゴーティエ」とは、当時有名だったリュート奏者一族の中の特に有名な2人のゴーティエのうち、年長のほうのアンヌモンを指す呼び方でした。ダングルベールはここでリュートの作品をほぼ原型を留めたままチェンバロに置き換えることにより、リュートとチェンバロがとても親しい楽器であることを感じさせようとしているようです。